

高次脳機能障害者のチャレンジ

広島県

森川るみ子もりかわるみこ



聞き慣れない障害の名前に、誰もが、不思議な顔をする。知つても、この障害を理解する人は、あまりいない。私自身も、この障害の苦しみを知つたのは、ここ最近で就職してからである。私がこの障害者になつたのは、平成十九年五月、東京で勤務中に「高血圧性脳内出血」を発症、減圧開頭血腫除去手術を受け、奇跡的に命は助かつたが、左半身麻痺まひ・高次脳機能障害という「重度障害者」となつてからである。

左半身麻痺は、手足が動かないでの、外見で誰にも分かるが、脳内の障害は、見えないため為、理解さ

れない事が多い。

物を見て何かを判断する、必要な情報に集中する、言葉を話す、相手に情報を伝える、記憶する、計算をする、計画を立てる事が、出来ない。遂行機能の低下の障害である。

私は、幸い、話が出来るなどして、それ程の苦痛は、感じる事はなかった。歩く事のリハビリに力を注いだ。

医師は、ハッキリと

「二度と歩けません。生涯、車イス生活です」

と断言した。

二人の子供は、成人していたが、私には、週三回の透析通いをする七十八歳の高齢の母が居たので、働き盛り四十九歳、まだまだ仕事をしなければなりません。リハビリの入院生活を五ヶ月過ごし、自宅に戻つてからも、日々の散歩、洗たく物を干したり取り入れるなどの努力を重ね、常に前向きチャレンジ精神の私は「社会復帰」を目指して、日々頑張った。左足に固定装具を装着して、杖をつき、手すりがあれば、一人で歩けるまでに回復をした。意欲的に就活をして、地元でも大手のドラッグストアで障害者雇用を積極的に取り組んでいらっしゃる会社の副社長とのご縁から、私のような重度障害者を快く受け入れて下さり、幸せな事に、私の目標である「社会復帰」を、発病以来四年ぶりに実現できたのです。その時は、高次脳機能障害に苦しむ事など考えもせず、「生涯、車イス生

活です」と宣告された私は、働く喜びで胸が高鳴り、通勤距離の遠さ、バス乗り換えの苦痛も喜びに感じました。

雨の日はカツパを着て、寒い冬も大きめのオーバーを着て、マフラーを巻き、雪だるまのような姿で、暑い夏は、麦藁帽子に汗拭きのタオルを首に巻き、オシャレとは程遠い姿で通勤していくも、それ全てが楽しい。働ける場所がある事、通勤出来る事が、何よりも有難く、幸せで感謝の日々である。しかし、希望に燃える私の前に「高次脳機能障害」が大きなハードルとなるのです。

指示される事が、覚えられない。メモを取る事が出来ない。そうなのです。この障害は同時に一つの事が、出来ないので。

元気な時は、同時にたくさんの事を進め、バリバリで働いていた私が、単純な作業を覚えられない。理解できない。
『悲しい、辛い』

会社のルールで、お客様が来られたときに、仕事をしながら、「いらっしゃいませ」と、山びこのように発する事すら出来ない。それまで、接客業を行い、接客マナーの講師まで務めた接客の達人だつた私だが、言い慣れた「いらっしゃいませ」の声が出ない。しかし、それが病気のせいだと、まだ理解できていない私の苦しみがスタートする事となるのです。確かに、漢字が書けない、九九が出来ない事は、気付いてはいたが、仕事を始めて、改めて、もがき苦しむ。担当者から、毎日、

「森川さん、メモを取って下さい。声を出して下さい」

と注意を受ける日々。半身麻痺の私の仕事は、パソコンへのデータ入力であるが、それさえも入力確認をするとミスが多い。何故なのか？ 完璧主義の今までの私では、予想外の結果であるが、自分でもどうすれば良いのか悩む日々。毎日担当者からは、

「森川さん、ちゃんと確認して下さい」

と、注意を受ける。そして、現実の厳しさは、輪をかけて私に迫ってくる。そのうち、職場の女性から、

「森川さんは、手がかかるし、時間がかかるからネ」

と、やんわりと言われる。その言葉も、弱っている私の神経にズタズタに刺さって、何度も泣きたくなつた事か。しかし、そこで負けたくなかつたので、私は頑張つた。ある時、パソコンの操作を質問すると、

「そんな事も知らないの？」

と言われる始末で、——もう辞めようか——と悩む中で、私は、高次脳機能障害の勉強会に参加して、詳しい説明のパンフレットをもらい、隅々まで読み、それまでの自分の状態を分析して、やっと理解出来た。その頃、主治医の先生にも相談してみると、

「森川さんは、大きな出血をしたから、特に大変なのですヨ。空間認識無視があるので、文字や数字を見る時に、ズレが発生するのですヨ」

と言われて、何故、確認ミスが発生するのか理解できたのだが、しかし、難しい点は、この目に見えない障害を、どう説明して、理解を得るかである。常に、

「森川さん、これは仕事ですから。リハビリではありません。仕事をしに来ているのですから」

と言われるのです。その事は、自分が一番痛切に感じて、会社に対して、申し訳ない気持ちでいっぱいです。ハローワークにも相談をしたが、

「高次の人には、仕事の紹介は難しいのですヨ。手間がかかるので、嫌う会社が多いので、こちらも、あまり積極的に紹介はしていないのです」

と言われてしまった。

私は、頭を鈍器で殴られたような衝撃を感じ、しばらく歩けなかつた。

——私は、もう生きて行く価値がない人間なのか——

今までの私は、自信に溢れ、自分が必要とされる仕事をしてきた。仕事が全てであつた。三度の食事よりも仕事をして結果を出す事に生き甲斐がいを覚え、正にキャリアウーマンを実証してきた。しかし、この病気は、その大切な遂行ができないのである。就職して一年目、契約更新の日を迎えて、会社側が出した答えは、一日四時間、二十日出勤が、一日五時間、十七日になり、時給も、最低賃金を提示された。

これも、大きなショックではあつたが、これが現実なのかと痛感する。

契約をして下さっただけでも、大変有難い話である。会社に対するミスを繰り返す価値のない人間を、雇つて下さるだけでも感謝すべき事柄である。多分、普通の会社ならば、一番に首を切られて当然であるから、私の会社は障害者に対して温かく迎えて下さっているからに他ならない。

私は、その気持ちに応える為にと、今まで以上に頑張った。

仕事に時間がかかる為、誰よりも早く出社して、仕事を始めた。常に明るく元気に、大きな声で挨拶をし、笑顔で対応した。

パソコンが苦手な私には、それぐらいの事でしか会社に結果を残せないからである。

会社説明会で使用する、会社案内のパンフレットとチラシを封筒にセットする作業も、片手で並ながらも、一日二百、三百部とセットをした。これは、流石に早いと、誉めて頂いた。その時は、すごく嬉しかった。^{うれ}また、ある時は、三時間立つたまま、書類を縮小して両面コピーする、数百枚の作業を進めた。

入力作業は、空間認識無視が出る為、私には時間もかかり、苦労するが、単純作業の方は、私には、楽に出来た。しかし、同じ姿勢は、足が硬直して痛くなる。手足は、動かないだけではなく、感覚がない為、今、足と手が何処にあるのか、自分では分からぬ。目で見て、あつ、手はここにある、と分かるが……仕事中でも歩行中でも、足が手が何処にあるのかが分からぬという、厄介な障害である。無論、その苦しみは、周囲の人は知らないと言うより、理解されない。だから、長時間コピーを

とる時は、コピー機の前にイスを持つて行き、座りながら作業をする。ある時、女性スタッフの人から

「狭い所なので、そこに座られると、他の人がここへ来る時に邪魔になるでしょう」

と注意された。残念な話だが、皆さん親切で優しい人も多いが、女性の方に厳しい人が多い。皆さん忙しくされていますから、きっと余裕がないのだろうな……と、私は、そこは素直に謝り、イスを戻す。現実問題、障害者を受け入れる会社であっても、一人一人のスタッフまでが、理解し協力できるかは、やはり難しいし厳しいという事が、現場、現実であると、私は日々痛感している。

「障害者が、仕事をする、チャレンジする事は、いけない事なのか!!」と思つて、前向きな私でも、気が弱くなる。しかし、そのような後向きな姿で、感傷に浸つていてる時間は、私にはなかつた。高齢の母が室内で転倒して、左足つけねを複雑骨折して、車イス生活となる。

母も、リハビリを頑張り、なんとか歩行器で一人で歩けるようになり自宅に戻るが、食事の仕度も片付けも出来ない。そのため、私は朝六時に起きて、母と自分の朝食の準備をして、片付けて、自分の身仕度を整えて、タクシーでバス停まで出かけ、福山駅前までバスで行き、乗り換えのため手すりを持つて地下道へ降り、会社方面のバス乗り場まで歩き、バスで会社に向かう。透析をする母は、高齢で心臓も弱っていて、検査の為に大きな市民病院へ連れ出しが、半身麻痺の私が母の車イスを押す

事は、大変である。しかし、母に多くの苦労や心配をかけた私は、何としても母の世話をしなくてはならず、会社での悩みを相談している暇はない。出来なければ、仕事を辞めるしかない。母の世話もしなければならないが、私には金銭的な余裕もなく、働くしかないのである。母は肺炎になりやすく、何度も入退院を繰り返す。入院すると、その度私はタクシーで病院通りをする為、一ヶ月のタクシーライセンスは増すばかり。タクシーライセンスを支払う為には、仕事をしなくてはならず、私は、仕事・金銭・母の事と悩む中で、子供達にも相談出来ず、苦しみ続けていた。そんな折、母の左足の指先から壊死が始まり（心臓が弱い為、足先まで血液が流れず、壊死は進行するばかり）、母は足の痛みを訴えるが、指先を切断する手術をするにも心臓がボロボロな為、手術中に死亡する可能性が高く、手術も出来ない。手術しても、糖尿の人は治りが悪く、何度も手術を繰り返すことになるとの事で、そのまま放置しても、いずれ菌が体中に回り、死亡する事となりますと医師より宣告され、どうすべきかと家族で話し合つた結果、兄・姉夫婦も「手術して死亡するくらいなら、そのままにするか」という結論になつた。当の本人も、「足が痛いのは辛いけど、死にたくないから、このまま我慢する」と希望したので、そのまま入院生活をする事となつた。

母の洗濯物を取りに行き、足の痛みで苦しむ姿を見るにつけ、死を待つだけの入院生活の母が可哀想で、母が生きているうちに何かをしてあげようと、タクシーライセンスはかかるが、仕事帰りに毎日母の病院へ通い、耳も難聴となり会話にならないが、母の顔や手足をマッサージして、食事の世話ををして帰

宅する日々を続ける。母の主治医には、

「心臓がかなり弱っていますので、いつどうなるか分かりません。覚悟しておいて下さい」

と言われた。私は、長びく入院生活を考え、病院の近場にある、病院が運営する介護施設に生活を移す。

ここを選んだのは、母と共に生活する為に適しているからである。車イスで生活が出来るうえに、透析の送り迎えもして下さるという利点もあり、夜間も職員の方がいらっしゃるので、より安心である。私にも病院通いや通勤に便利であり、まず何にしても、高いタクシー代を節約出来るからである。

しかし、残念ながら、母との生活の場所を確保したにも関わらず、母は平成二十五年一月十六日、家族に見守られつつ、苦痛の日々から解放されるかのように、静かに父と長男の待つ世界へと旅立つたのです。

母は、最後まで、ボロボロになつた心臓をフルに動かし、最後の一秒まで、大きく息をして、目を閉じました。

この不自由な私の体を案じて、老後も安心して一人でも暮らせるようにと導くかのように、私が介護施設に落ち着くのを見届けて、この世を去ってしまった。母らしい最期であつた。

母が一度も入る事がなかつたこの部屋で、私の一人暮らしがスタートした。

母と父の仏壇に毎朝夕に合掌し、語りかけつつ、日々の仕事に悩みながら、変わらぬ日々を送る。担当者に、私の病気を理解してもらう為に、仕事の進め方や、何故ミスを起こすか、自分で分析をする。そして、担当者からは、そのミスを防ぐための方法も考へるように指示される。しかし、これが問題なのである。それが分かれば、私もここまで苦しまない。^①伝票や資料を右側に置く。左側に空間認識無視がある為、右を極力、意識する。^②指さし確認で、一語一語を確認する。^③まず、正しい入力をする。など考へるも、ミスは減らない。

次に担当者からは、

「今後、新しいスタッフが入りますから、とにかく、ミスを減らして下さい。パソコンを勉強して下さい」と言われた。

確かに私は、パソコン（エクセル）は苦手であった。以前から、本を買って勉強をしようとしたが、高次の障害では、本を読み、それを立体的に考へる事が出来ない。普通に本を読み学習する事が出来ない事を、理解してもらえないのも難しい問題で、どう説明すれば良いのか、私には分からなかつた。ある日、入力中に失敗をしてしまい、いつものように「すみません、これはどうしたらいいでしょうか」

と尋ねたが、

「この状態は、いつからですか？ 分からないのなら、すぐに質問をして下さい」

と言われた。勿論、すぐ質問をしたかったが、担当者は、別件で忙しくされていた為、不安になりました。一旦パソコンの保存をかけてしまった。担当者いわく、保存する前に質問をしていたら、データをすぐ修正できたものを、そのタイミングが悪く、また叱られた。

「これは、単純な操作です。こことこここのキーを押すだけの事ですヨ。これは、森川さんがパソコンの操作を知らないからです。前から言っているでしょう。一つ一つパソコン操作を教えている時間はありません。自分で本を読むなり、勉強して下さい」

とまた厳しく、周囲の人間に聞こえるよう注意をされる。本当に辛い。

——もう辞めた方がいいのだろうか——

でも、中途半端に逃げるのは、自分に対しても、悔しい。私を救つて下さった副社長に対しても、申し訳ない事だ。結果を残さず逃げたら、私を信じて期待して下さった、副社長にも会社にも申し訳なく、それは出来ない。夜も眠れない程悩み、しかし、このままではいけないと思い、高次の勉強会の担当の先生に相談をした。

「高次の人には、自分の事を分析する事も出来ないし、改善しようと努力が出来ない人が多い中で、ちゃんと自分を理解して前進しようと努力している森川さんは、本当凄い事ヨ。誰もが出来ない事をしているのだから、担当者の方も森川さんなら出来ると期待しているから、言われているのですヨ。辞めるのは最後の手段だから、まだ、森川さんなら越えられるヨ。辞めるのはいつでも出来るから、

本当に辛くて苦しい時は、いつでも相談にのるから、頑張つてみたら」

と言われ、少し勇気が出た。そうなんだ、私は高次の人では出来ない事をしているのだ。私は出来る、やれると思い直し、パソコン教室に行く事を決断する。

それなりの金額もかかり、少々痛い出費ではあったが、給料以上の授業料を払つて、週二回のカリキュラムでスタートする。

「負けてたまるか！」

私は、高次の人達の為にも逃げたくはなかつた。やはり仕事は出来ないと、高次の人全員が否定される事が許せなかつた。負けん気の強い私の性分である。私は、どうしても、「高次の人間でも、可能性がある」という成功事例を作りたかったのである。それが、私の使命でもあるからだ。

教室に通い出して、少し余裕が出た。どうか、この操作で出来るんだという事が増え、しかし、担当者からのダメ出しは変わらず、

「指示した事を覚えていない。メモを書いていないから。私はそういう指示はしていないでしよう」と言われる始末である。

一つの作業をしている時に、途中で、次の指示を出される。それも短時間でするよう……。

私の障害は、二つの事は同時に出来ない。今やっている事を一旦終了して切り替えないとい、次の指示が入らないのだ。

しかし、これもやはり理解されない。一回リセットして起動するまでには時間がかかる。脳の中で、そういう作業をして次に進む事など、理解されない。

多分、これは、担当者が悪い訳でもなく、この状況で、仕事をしようとした私が、ある意味無謀であつた事と、高次をしつかり理解していなかつた私自身の問題であると反省をすると共に、このような障害者を指導し続けて下さる担当者にも上司にも感謝する。

自らが、苦しい迷いの道を選択してしまつたのである。しかし、普段の生活では、この障害は分からなかつた事だと思う。あまりにも辛い日々で、常に前向きの私も、前に進めない状態になつた時、私は市の障害者就職サポートセンターに相談に行つてみた。相談員の方は、

「これだけ自分の事を語れる森川さんなら、上司の方に、一度話してみたらどうですか。話が聞きやすいし、力がある森川さんだから、きっと、理解してもらえるのではないか？ もしもの時は、私が、上司の方や担当者の方に、障害の詳しい説明をしに行きます」

と言つて下さつたので、自分の力で話してみる事にした。次に出勤した時に、課長に時間をとつて話せるようにしてもらい、状況や自分の気持ちを正直に話してみると、課長は、

「森川さんの仕事に対する意気込みは、凄いです。いつも元気で明るく、森川さんは、今、我々の職場に必要な人員ですヨ。今、森川さんにやつてもらつている仕事は、とても助かっていますし、戦力ですから。これからも私達は仲間ですから、一緒に頑張りましょう。私は、森川さんの病気について

て、あまり理解できていませんでした。もつと早くに、私から、こういう時間を持つべきでした。ごめんなさい。これからは、森川さんがもつと輝ける仕事を作っていきます。その環境を整えますから、少し時間を下さい」

と言つて下さった。

私は、単純ながら、涙が出る程嬉しかった。やつと理解された。——ヤツタ——。

次にまた、二年目の契約更新の日が訪れ、部長からも
「森川さんが働きやすい仕事を考えていきます。森川さんの働く姿勢は、素晴らしいものがあります」と、賃金は、そのままであるが、次の更新をして下さる事となつた。

本当に有難く、感謝の気持ちで一杯であった。私のチャレンジは、まだまだこれからである。本当の意味での、障害者も健常者も共に生きる社会になるように、啓蒙活動をしていく必要性を感じる。私の命ある限り、私はチャレンジを続ける。この高次の障害と共に、それが、残された私の人生であるだろうから。そして、このチャレンジを受けて下さった職場や同僚・上司に感謝しつつ、今まで以上に、明るく元気に私のチャレンジは続していく。

森川るみ子

昭和三十四年生まれ パート事務職 広島県福山市在住

【受賞のことば】

受賞のお知らせを頂き、大変嬉しく、私の夢が一つ叶いました。本当にありがとうございます。神様が私の課題に、評価をして下さったのだと思います。やはり、努力は報われるのですね。会社からも、本年十月より、人事教育部へ配属となり、私の輝ける環境を作つて下さり、好きな研修の仕事が出来るようになりました。今回の受賞を会社の上司・同僚も喜んで下さり、記念の写真も担当者の方が撮つて下さり。私は感謝の気持ちで一杯です。

選評

高血圧性脳内出血の後遺症で高次脳機能障害になつた森川さんは、社会復帰したくても、指示されたことを覚えられない、メモを取ることができないなどのハンディゆえに、なかなか社会復帰ができない。その上、母親が転倒による怪我で車椅子生活になる。やつと雇つてもらえた会社では、仕事を思うようにこなせなくて大変な日々。必死にパソコン教室にも通う。でもある日、思い切つて課長に自分の障害について詳しく話すと、はじめてしっかりと理解され、職場に温かく受け容れられ、一層のチャレンジする意欲に燃える。高次脳機能障害者がどんな苦闘をしているかが、とてもリアルに伝わってくる手記だと感じました。

(柳田 邦男)